くらしの中で読む『正法眼蔵』

―面授の巻―　その七

成興寺住職　小倉玄照

〈本文〉

屋裏に正伝しいはく、八塔を礼拝するものは、罪障解脱し、道果感得す。これ釈迦牟尼仏の道現成処を、生処に建立し、転法輪処に建立し、成道処に建立し、涅槃処に建立し、曲女城辺にのこり、菴羅衛林にのこれる、大地を成じ大空を成ぜり。乃至、声香味触法色処等に塔成せるを礼拝するによりて、道果現成す。この八塔を礼拝するを、西天竺国のあまねき勤修として、在家出家・天衆人衆、きほうて礼拝供養するなり。これすなはち一巻の経典なり。

仏経はかくのごとし。いはんやまた、三十七品の法を修行して、道果を箇箇生生に成就するは、釈迦牟尼仏の亙古亙今の修行修治の蹤跡を、処処の古路に流布せしめて、古今に歴然せるがゆゑに成道す。

しるべし、かの八塔の層層なる、霜華いくばくかあらたまる。風雨しばしばをかさんとすれど、空にあとせり、色にあとせる、その功徳を、いまの人にをしまざること減少せず。かの根・力・覚・道、いま修行せんとするに、煩悩あり、惑障ありといへども、修証するに、そのちから

なほいまあらたなり。

釈迦牟尼仏の功徳、それかくのごとし。いはんやいまの面授は、かれらに比準すべからず。かの三十七品菩提分法は、かの仏面・仏心・仏身・仏道・仏光・仏舌等を根元とせり。かの八塔の功徳聚、また仏面等を本基とせり。いま学仏法の漢として、透脱の活路に行履せんに、閑静の昼夜、つらつら思量功夫すべし、勧喜随喜すべきなり。

〈現代語私訳〉

わが仏門には、八大霊塔を礼拝する者は、罪の障から解かれて安心し、仏道に生きる身のありがたさを実感することが出来ると正伝されている。これは、釈迦牟尼仏の御一代における記念すべき重要遺蹟、例えば御降誕の地に建立し、初めて仏法を説いた聖蹟、いわゆる初転法輪の地に建立し、成道の聖地に建立し、御入滅の聖地に建立し、或いは忉利天からこの地に降下されたという伝説がある曲女城のほとりに残り、また毘舎離城外の釈尊説法の地として知られるマンゴー樹（菴羅衛）の林園に残っている仏跡として、大地にどっしりと建ち、大空にそびえている。視点を変えれば、釈尊の生きざまを人間が認識しやすいように塔のかたちで示されているのを礼拝すれば、仏道修行のありがたみが出現するのである。この八塔を礼拝することをインドでは誰もがねんごろに勤めるべき修行として、在家も出家も、天人も人間も、競って礼拝供養するのである。この八塔はつまるところ一巻の経典にほかならないのである。

経典とはこのようなものである。ましてや釈尊の説かれる修行方法を集成すれば三十七種類になると言われるが、それらを修行してその成果を一人一人がその生きざまの上に示すことができるのは、釈迦牟尼仏が生涯かけて修行され

たあとかたをあちこちに残し、それを人々に広く知らしめて、今に至るまではっきりとさせておられるからであって、そこにこそ仏道が生きているのである。

承知しておくがよい。かの八塔がそれぞれに層々として高くそびえ立ち、幾歳月が経過したであろうか。風雨がしばしば浸食しようとしたが、伝承によって空にイメージとして残り、遺跡としてかたちを残し、その功徳を現代の人々にもおしむことなく当時のままに及ぼしている。三十七種の修行方法を今の時代に実践しようとすれば、たとえ煩悩があり、惑いや障りがあったとしても、釈尊の生き方を慕い求める限りその尊さありがたさを新鮮な感動でもって我が身心で肯うことが出来る。

釈迦牟尼仏の功徳のありがたさは、まさにこのような次第である。まして、この巻のテーマとして問題にしている面授は、今あげた八塔礼拝等の功徳とは比較すべくもなく尊い。例の三十七種の修行方法にしても仏面・仏心・仏身・仏道・仏光・仏舌等を基本としたものである。さきにあげた八塔の功徳のもろもろもまた釈尊の面等を拝むことが基本となっている。いま仏法を学ぶ者としては、世俗的発想から脱して、自然の摂理に添いきって日常を生きるには、大自然の静寂の中で昼も夜も、よくよく釈尊の御一代について思いを巡らし功夫しなければならぬ、大いなる喜びをもってその御一代の生き方を慕い求めねばならぬ。

散骨なんてとんでもない

大都会の生活に倦んで、定年を迎えたのを潮時に過疎の田舎に移住して来る人が結構あるようです。私の住んでいる町からは自動車で一時間ばかりを要するM町の空き家に都会から老妻

と共に移住して農耕を楽しみながら年金生活を送っているAさんもそんな一人です。

ある時、ふとした縁から、仏壇への回向を頼まれて私はAさん宅へお伺いしました。

「こちらへ移ってから長い間、ご先祖様にお経をあげておりませんでした。気になっていました。どうぞよろしく御供養下さい。」

私は老夫婦と一緒に仏壇に祭られた先祖の御位牌に香華灯燭を供え、読経しました。Aさん夫婦は、大層喜んで、奥様手づくりの精進料理で接待をしてくれました。

会食をしながらAさんは、異なことを語りだしました。

「この頃、私たちも死後のことが気になり始めました。葬式をどういうかたちでしたものか、と家内とよく語りあうのです。」

Aさんが言うには、田舎で生活していて、村人たちとは、親しく交流させていただいているから、町内会の一員とはなっていないけれど、お葬式があれば、香料をお供えし、見立てをしている。しかし、自分の時には、村の人に迷惑をかけたくないから、隣りのT市にある葬儀用の会館で子供と孫だけに立ち会って貰ってしめやかに葬儀をして貰いたいと思っている。その時は、ぜひ貴僧に引導を渡して貰いたい――

Aさんは、さらに「子どもたちには、私の遺体は、火葬に付した後、どこかの山中か海上にひそかに散骨して貰うよう頼んでおきたいと思っている」と言われます。

いわゆる「進歩的知識人」の発想。それにしても「葬式は子や孫に列席してきちんとして貰いたい」ということと、「遺体は後腐れがないように散骨して貰いたい」ということとは、相当に矛盾しています。

「無常の世の中ですから、個体は必ず死にます。しかし、いのちは永遠なのです。あなたの

いのちは、御両親から伝えられたものであり、それを御子息に伝え終ったら肉体は死を迎えます。しかし、伝えたからハイそれでおしまい、ではありません。あなたが、お仏壇にお祀りした御両親のお位牌に毎日手を合わせて拝みながら、それだけでは何だか申し訳ないような思いがずうっと気にかかっていて、今日、私をお招き下さって供養の法要をされました。そして、何だか胸につかえたものが下りたように安堵されたと思います。

御両親の御位牌を拝みつつ、ありし日の御姿を偲ぶ――そのことによって、私たちは永遠の過去に連なるいのちの根源に手を合わせていることにもなっているのです。

あなたの御葬儀はとても大切で意義あることなのです。人知れずしめやかに――というあなたの願いがわからぬでもありません。しかし、あなたが、自立して大都会で生活している御子息と別かれて過疎の山村で生活した老後のその生きざまを御子息たちに偲んで貰うことも大切な「いのち」を伝えるための行持なのです。

村の人たちがあなたの死を悼み、みんな集まって紙細工で旗を作り、提灯をこしらえる。そして、大がかりな葬列を整えてあなたの棺を村境まで送ってくれる――あなたが身罷ったという報せを受けてかけつけた都会住まいの御子息たちは、片田舎の大時代的なお葬式をわけもわからず夢中で勤めながら、あなたが田舎の村人たちと哀歓を共にしつつ、淋しいけれど、しみじみとした人情の中で豊かな老後の人生を過ごされたことに感動するでしょう。そこに生じる別離の涙に、あなたのいのちが正しく御子息たちに伝わったことを私は認めたいと思います。

あなたの亡きあと、遺骨は、今ある御先祖の墓にきちんと納めた方がよいでしょう。お彼岸やお盆、或いは年忌の法要ごとにそこにお参り

することによって、あなたの生きざまは、あなたのいのちが伝えられた子孫の身心に永遠に生き続けるのです。葬儀や御法事を決して虚礼と考えてはいけません。」

交互に会話を交わしつつ、私は大要そんなことを話しました。Aさんは得心されました。自分の葬儀は、先祖代々の墓地がある大都会のB寺の和尚さんをお招きして過疎の田舎で村のしきたりに従って執り行って貰うよう子息たちによく伝えておきたい。そして、遺骨は、檀那寺の先祖代々の墓地へ納め、古来のしきたりに従って墓参や年回法要をねんごろに勤めてほしい、と頼むことにする——Aさんは、長い間、気にかかっていた自分の死後のことについてそんな風に決断されました。

墓石や位牌を拝むことの大切さ

お釈迦様の生きざまを慕い、お釈迦さまのように生きたい、と願うことが仏教徒としての生き方の基本です。お釈迦さまに面授面受したいのちを代々受け伝えて今を生きているのが仏教徒としての私ですからそれは当然な話です。

無常の世に生きながら永遠の存在であろうと願うならば、いのちの相続は必須の条件です。仏教、なかんずく禅門では悟道ということを重視します。いわゆるさとりを問題とするのですが、それはいうなれば面授面受の重要性を認識し、それが成就の可能性を臍おちすることと言ってもよいでしょう。

さとりを実現する智慧を得るための修行方法として説く「三十七品菩提分法（さんじゅうしちぼんぼだいぶんぽう）」も、ことばを換えれば「面授面受」を障りなく成就するためのものであるということもできます。（ちなみに三十七品とは、四念処・四正断・四神足・五根・五力・七覚支・八正道の七科の集計三十七項目

のこと。）

もちろん、この段の本文で説く八大霊塔に、対する信仰も釈尊の面授を補完するものとして受けとめよ、と道元禅師は仰せになっているようです。八塔を礼拝することによって今は亡き釈尊の御生涯を彷彿（ほうふつ）とするのです。時代の経過と共にとかくすると面授面受により伝えられたいのちの本質が風化していくのを回復させる力が八塔礼拝の行にはあるということでしょう。

私たちの家庭で仏壇に先祖の位牌を祀り、納骨した墓石に手を合わせて拝む。或いは、お寺にお参りすることも、八塔を礼拝することと本質的には同じです。幼少時から生活を共にした今は亡き父や母の墓石に手を合わせて祈ることによって、今ある私のいのちの無常性を自覚するのです。父や母と喜怒哀楽を共にしながら生活する中で、そのいのちを面授面受して今の私が存在していることを確認するのです。世俗的にはそれを「感謝」とか「報恩」とかと表現します。

父や母の背後には、祖父や祖母があります。そのまた背後には、曽祖父や曽祖母。そしてそのいのちに連なる数知れぬご先祖があります。先祖代々の精霊です。

それらに手を合わせて礼拝しつつ、連綿として伝えられた私のいのちを子孫に伝えて行くことをも自分の義務として先祖代々の精霊に誓うのです。

また曹洞宗の仏壇には、お釈迦さまを中心に道元禅師と瑩山禅師の三尊を祭りますが、それは、今ある私どものいのちの根源を象徴していると言ってよいでしょう。面授面受して伝えるいのちの根源が三尊仏に象徴的に示されているのです。